

尾道に住む
ふたりの神様の話

柴
智寿恵

絵
藤村佳澄



尾道には、たくさんの神様がいます。その中でも、鳥須井神社の神と幸之神は特に仲がよかったです。

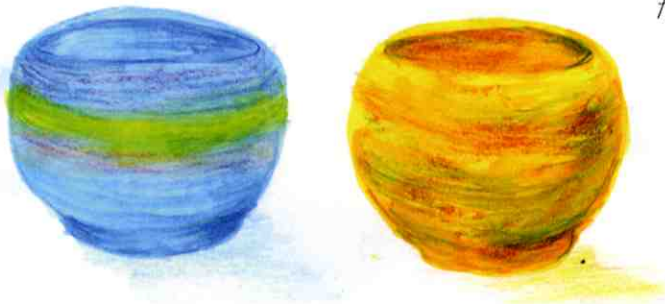
鳥須井神社へと続く石畳の坂にある大きな木の下で、彼らは静かに酒を飲んでいました。時折、風が葉を鳴らす音や子どもたちの楽しそうな叫び声を耳障りな車のエンジン音が遮り、そのたびに一方の神は眉間に皺を寄せた。

あぐらをかいて背筋をピンとのぼしながら飲んでいるこの神は鳥須井神社の神だ。姿勢に現れている通り、生真面目で頑固な神だった。自分で酌をしては、猪口を口元へ運んでいる。性格を表すように、顔は武骨でいかめしく、背が高かった。

一方幸之神は、腰に届くほどの長髪を一つに束ねた色男であった。風流を愛し喜楽を好む彼は、幸之神社で道祖神として祀られていた。戯れが過ぎて鳥須井の神に怒られることもあるが、社がなくなつた現在も、尾道にある道という道をたつたひとりを守っている働き者

でもあった。

だが、今は一休みとばかりに木にもたれかかり、肌を感じられないほどの風が揺らす木の葉の影を眺めていた。



「のう、幸之」

鳥須井の神の声に、幸之神は視線をあげた。

「おぬしはずつと影の動く様を見ているが、それはそんなに面白いのか」

幸之神は、ひらりと舞い落ちた木の葉に手をのばした。木の葉は、まるで呼ばれたかのようにふわりと手のひらに収まる。

「面白いさ。刻一刻と移り変わる姿は、見ていてあきることがない」

「そうか」

「そうさ」

彼らは、それぞれ納得したように頷いた。影が笑うように揺れた。

「ねえ、鳥須井の。今日は様子がおかしいが、何か気がかりなことでもあるのかな」

「む、なぜそう思った」

不思議そうに問うた鳥須井の神を笑いながら、幸之神は徳利どくりの山を指差した。明らかに普段飲む量を超えている。それに気づいた鳥須井の神は、照れたように頭をかいた。

「なに、今日お参りに来た娘のことだ」

「惚れたのか」

幸之神は、楽しそうに鳥須井の神をからかった。色めいた噂一つ流れたことのない鳥須井の神は、不愉快そうに猪口を地面に置いた。

「すまない、たちの悪い冗談だった」

戯れが過ぎたことに気づいた幸之神は、いち早く頭をさげた。機を失った鳥須井の神は、しかめ面のまま話を続ける。

「うちは縁結びで有名な神社だからな、好きな男との恋愛成就を祈りに来たのだ。それがひどく真剣な様子でな。お守りまで買って行ったのだ」

「ふむ。もしかして、願いが一つだけ叶うという蜻蛉玉せうれいぎよを買っていったのかな」

力強く頷く姿を見て、幸之神は合点がいったとばかりに口を開いた。

「なるほど。その娘は、お守りの効力にひどく期待しているのだね」

「そうなのだ。娘の想いが伝わってきてな、な

んとかしてやりたいと思うのだよ」

そう言つて鳥須井の神は、幸之神と正面から向き合つた。ひゆうと、風が吹いて葉が音を立てた。

「ふふ、面白そうだ。よいよ、一緒に行つて手伝つてやろう。親しくしている神も多いから、力になれることもあるだろう」

いつのまにか、幸之神は体を起こしていた。

鳥須井の神は、感謝する、と一言だけ述べた。

「では、行こうか」

「ああ」

彼らは立ち上がった。

「あれだ」

鳥須井の神は空中から、下方を行く六人を指差した。一行は、縦一列にならないと歩けないような細い坂道を上っていく。名所が見えるたび、珍しそうに足を止めてカメラを構える。旅行者としか思えないいでたちを見て、幸之神は説明を求めた。

「研修旅行とやらで尾道に来たらしい。明日の朝、帰るのだそうだ。あの一髪髪の長いのが願ひ玉を買つていつた娘で、ほれ、列の最後にいる男が娘の想ひ人だ」

「では、私たちが何か出来るのは明日までということかな。ふふ、期限つきのほうがやりがいがある」

不敵に笑つた幸之神は、家々の間から尾道水道がよく見えることを確認した。水面が太陽を反射して、眩く輝いている。一方、鳥須井の神は腕組みをして何事か考え込んでいたようだった。

「うむ」

鳥須井の神は、考えがまとまつたのか大きく頷いた。武骨な顔に、自信に満ちた笑みが浮かぶ。

「なあ幸之、石で足をひっかけた接吻させたらどうだ。そうしたら、あの男も責任を取つて娘に交際を申し込むだろう」

その自信は、幸之神の瞳を見てしぼんだよ

うだった。

「私は、女性の心を全て知っているとわけておかないけれどね。娘が望まれて交際をした
いと思っていることくらいはわかるよ」

「ならば、おぬしにはいい案があるのか」

不満そうな鳥須井の神に、幸之神は優雅に
微笑んでみせた。

「無論だとも。君は、考えが古いのだよ。もっと、
恋には浪漫がなければ」

「浪漫か」

「手本を見せてあげよう。君にも、協力しても
らうよ」

そう言って幸之神は、鳥須井の神に耳打ち
をした。



一行が通りかかるのを待ち、作戦は実行に

移された。前から三番目を歩いてきた娘の、
蜻蛉玉のストラップが鞆から落ちる。娘は手
をのばしたが、それも虚しくストラップは地
面に落ち、転がっていった。ストラップは、
男の足元で止まった。

「ほら、男が蜻蛉玉を手渡してやっただろう。

これで二人の位置は近くなり、会話ができる
というわけだ」

「……おぬしの言った通りになった」

驚いた様子の鳥須井の神に、幸之神はまだ
まだこれからだよ、と言った。鳥須井の神が
見守っていると、一行は尾道水道が視界いっ
ぱいに望める位置に辿りついた。

その時、強い風が山から水道に吹き込んだ。
周囲の木々が強く揺さぶられ、何枚かの葉が
宙を舞い、娘たちのスカートの手端がはためく。
慌てて視線を逸らした鳥須井の神を見て、幸
之神はくくっと笑った。

「ほら、見たまえ鳥須井の」



幸之神に言われて尾道水道の方を見ると、そこには虹がかかっていた。鳥須井の神は、小さくうなる。

「先ほど、風の神に頼んでおいたのだよ。どうだ、浪漫だろう」

「ああ……」

鳥須井の神は娘の方を見た。男が虹に気づき、娘に指差して教えている。娘は嬉しそうに男と虹を眺めた。

「浪漫だ」

鳥須井の神の感服した様子に、幸之神は満足したようだった。

「このような調子で手助けを続ければ、二人は交際を始めるだろうね」

「うむ。娘は、幸せそうだな」

鳥須井の神は、微かに口元をほころばせた。

「さて、お手本は充分見せたと思うのだが……この後、どうしたらいいのだろうね」

幸之神は、挑発するように鳥須井の神を見た。

また悩み始めた鳥須井の神は、空を眺め、それから二人に視線を移した。そして、今度こそとばかりに胸を張った。

「仲間とはぐれさせ、二人きりにするのはどうだ」

幸之神は、軽く鳥須井の神の背を叩いた

「まあ、悪い手ではないだろうね。君にしては、上出来なのかもしれない」

鳥須井の神は、喜んでいいのか悪いのか、なんとも複雑な顔をした。

「では、迷わせようか」

幸之神が指を鳴らすと、みるみるうちに二人が列から離れていく。楽しく会話をしている人々は、それに気が付かない。

「二人きりなら、もっと話ができるだろう。そうしたら、おぬしの言う浪漫のあることがあるかもしれない」

嬉しそうな鳥須井の神を尻目に、幸之神は遠ざかっていく二人をじつと見ていた。二人はお互いしか目に入っていない様子で、少し

の時間ももつたいないかのようにせわしなく言葉を交わしている。そう見て取った幸之神は、急に退屈そうな顔になった。そして、すぐにでも追おうとしている鳥須井の神に声をかけた。

「ねえ、鳥須井の。これ以上面白いことはなさそうだから、私は帰ることにするよ」

鳥須井の神は、驚いて幸之神を見つめた。幸之神は、おだやかに言葉を続ける。

「すまないね。次の月が満ちた晩に酒を持って行くから、それで勘弁してくれないか」

悪びれる様子もない幸之神に、鳥須井の神は小さく溜息をつき、頷いた。

「では、月が満ちた日に」

「ああ、またね」

そう言って、彼らは別れた。



満月の晩、彼らはまた大木の下で酒を酌み交わしていた。

「今宵の月は、特に美しいね」

鳥須井の神が空を見上げると、月がしっとりと輝いていた。花の甘い香りが、微かに風に乗って漂ってくる。今はもう、子どもの声も、車のエンジン音も聞こえてこない。時折木の葉が鳴るだけだ。

「のう、幸之」

「なんだい」

「おぬし、あの娘のことは聞かんのか」

前をじっと見つめたまま、鳥須井の神は口を開いた。幸之神は、猪口を口元まで運んだ。おいしそうに、クピリと飲み干す。

「聞くまでもないさ」

むう、と鳥須井の神はうなづいた。

「おぬしには、全てがわかつておるのか」

「まさか」

幸之神は、うっすらと笑った。徳利を持ち上げて、鳥須井の神の猪口に中身を注ぐ。

「私にわかることは、ごく僅かだ。しかしね、男女が付き合うまでに時間が必要なことは経験から知っているのだよ。それが、本当に恋しい相手であればあるほどにね」

「そうなのか」

「そうさ」

鳥須井の神は、真剣に聞き入っている。その様子をまた笑って、幸之神は自身の猪口にも酒を注いだ。

「きっかけは充分に与えたのだ。後は願ひ玉の加護に任せて、私たちは娘の幸せでも祈りつつ酒でも飲もうじゃないか」

「うむ。いつか、二人で参ってくれる日を心待ちにするか」

彼らは軽く猪口を上げ、酒に月を映しながら一息で飲んだのだった。